

# 性差別的態度を起因とする親密関係における暴力の

## 発生メカニズムの解明

—効果的な予防的介入・治療的介入のための実証的検討—

研究代表者

東北大学大学院文学研究科 荒井 崇史

共同研究者

追手門学院大学心理学部 金政 祐司

東北大学大学院文学研究科 鈴木 沙央理

### 1. まえがき

親密関係における暴力 (Intimate Partner Violence : 以下, IPV とする) は, 世界的に蔓延している公衆衛生上の問題であり, 現代において解決すべき最も重要な課題のひとつである。実際, 欧米では, 大学生までの若年層において, 恋愛関係内で暴力を受けた者の割合は, 身体的暴力で 20.0~37.0%, 心理的攻撃で約 60.0%, 性的虐待で 2.7~18.0%の範囲にあると指摘される (Shorey et al., 2008)。IPV は欧米社会だけでなく, 日本でも問題となっている。例えば, 内閣府男女共同参画局の全国調査 (内閣府男女共同参画局, 2021b) によると, 10 代から 30 代の間に交際相手から身体的暴力, 心理的攻撃, 経済的圧力, 性的強要のいずれかを受けた経験がある人は, 男性 1,031 人のうち 8.1%, 女性 1,162 人のうち 16.7%にのぼることが報告されている。また, 配偶者からの暴力に関しては, 過去に配偶者から暴力を受けた経験がある者が回答者 2,591 人中 22.5%と, 約 4 人に 1 人が配偶者からの暴力の被害経験を報告している。このように, IPV の問題は日本においても看過できない重要な問題であると言える。

特に, Covid-19 の広まりに伴い, 日本社会では密集を避け, 自宅に待機するような厳しい対応が求められた。他者との接触を避けることは, 感染症予防のためには必要であるだろうが, 一方で, 日常生活から他者を排除することで, 家庭という親密空間をより閉鎖的な空間へと変容させたとも考えられる。これは犯罪研究においては由々しき問題である。例えば, 日常活動理論 (Cohen & Felson, 1979) では, 犯意ある行為者 (DV 加害者), ふさわしい対象 (家庭内の弱者), そして有能な監視者の不在 (家庭外の第三者) がそろった状況で犯罪が生じると考える。この理論に基づけば, 他者を家庭から排除するような状況は, 問題に対する有能な監視者を遠ざけることにつながり, 結果的に問題を助長することが予想される。実際, 内閣府男女共同参

画局の調査によれば、Covid-19 下の DV 相談件数は増加しており、全国の配偶者暴力相談支援センター等に寄せられた相談件数は、2020 年は 19 万 0,030 件で、2019 年度比で約 1.6 倍に増加したという（内閣府男女共同参画局，2021a）。このような社会情勢を踏まえて、本研究では IPV 加害に影響する要因の検討を通して、加害や再加害予防のための教育・治療に資する知見を提出することを試みる。

なお、IPV は親密関係における男性から女性への暴力と考えられがちであるが、女性から男性への暴力も存在する。一般的には男性の方が女性よりも、多くの攻撃行動を示すが、これは女性が男性に対して攻撃行動を行わないことを意味するわけではない。実際、Archer (2000) は、デート暴力 (Dating Violence) に関する先行研究のメタ分析を通して、男性から女性への暴力よりも、むしろ女性から男性への暴力の方が多いことを報告している。それに加えて、デート暴力は交際関係にある二者の一方的なスタティックな現象ではなく、交際関係にある二者がダイナミックに作用することで生じる現象であることも指摘されている (Foshee, 1996; Lewis, Tragea, & Fremouw, 2002)。こうした指摘を踏まえ、本研究では男性から女性への攻撃だけではなく、女性から男性への攻撃にも注目する。また、一方向の影響過程を分析するだけではなく、男女双方の影響を考慮した検討を行う。

## 2. 問題と目的

こうした背景から、本研究では、敵意的性差別的態度と社会的関係という二つの視点から親密関係における暴力加害をもたらす要因を検証することを目的とした（「社会的孤立」の視点は Covid-19 の問題が進展する中で「Stay at Home」が叫ばれる状況が発生し、それに伴って当初の研究計画を変更して調査することを認めていただいた）。なお、本研究では IPV の中でも、心理的攻撃加害に注目する。その理由は、命の危険により直結する身体的暴力や性的暴力は、言語による攻撃などの心理的攻撃によって予測することが可能であるとされる (Bookwala et al., 1992)。予防的教育や治療的教育を考えるのであれば、身体的暴力や性的暴力のように被害が深刻になる以前に、介入する必要があると考えられる。こうした意図から、本研究では、IPV の中でも心理的攻撃加害に注目し、心理的攻撃加害をもたらす要因を検証することとした。

### 2. 1. 性差別的態度と親密関係における暴力

従来の研究では、性差別的態度を有する男性は親密関係にある相手への暴力により寛容で (e.g., Chen, Fiske, & Lee, 2009)、親密関係にある相手に日常的に攻撃的に振る舞う傾向がある (e.g., Cross et al., 2017)。しかしながら、性差別的態度がこうした攻撃行動を生み出すメカニズムはよくわかっていない。これに対して、近年では、性差別的態度を持つ男性の“自己の勢力の大きさ”に対する認知の歪みが関与している可能性が指摘されている。ここでいう“勢力”とは、対人関係において他者の行動や態度、感情などに影響を与える力を指す。本研究では、こうした先行研究に基づいて、親密関係における自己の勢力の大きさ認知（厳密には、“自己の勢力の大きさ”に対する認知の歪み）に注目し、それが親密関係における暴力に及ぼす影響を

複数の研究を通して明らかにすることを第一の目的とした。

性差別的態度は、なぜ親密関係にある相手への攻撃を生み出すのだろうか。従来、性差別的態度を持つ男性の“勢力への欲求”が、パートナーへの攻撃を生み出す主要因であるとされてきた (e.g., Barnett, Lee, & Thelen, 1997)。ここでいう“勢力への欲求”とは、パートナーの女性を支配できるほどの大きな勢力を所有したいという欲求であり、こうした欲求により攻撃行動が動機づけられると考えられてきた。しかし近年、この問いへの回答として新たな可能性が浮上している。Cross et al. (2019) は性差別的態度を持つ男性を対象として、「パートナーとの力関係において、自分がどの程度の大きさの勢力を持っているか」を自己評価してもらう調査を行った。その際、客観的評価としてパートナーにも相手（つまり、恋人・夫である男性）の勢力の大きさの評価を求めた。そして、それらのデータを比較することで、客観的評価に対して主観的評価がどの位歪んでいるのかを検証した。その結果、性差別的態度を持つ男性は、親密関係で自己の勢力の大きさを過小評価することが示された。また、性差別的態度を有する男性は、“パートナーを支配するための大きな勢力を所有したい”という欲求に直接的に動機づけられて攻撃するのではなく、“自己の勢力が小さい”という認知の歪みから、勢力の大きさを回復する手段としてパートナーに攻撃を向ける可能性が示唆された。

Cross et al. (2019) は IPV 研究に新たな視点をもたらした重要な研究であるが、いくつかの問題点が挙げられる。第一に、なぜ性差別的態度が自己の勢力の過小評価につながるのかが明らかにされていない点である。そこで、本研究では、勢力の大きさ認知に影響を及ぼす要因を明らかにする。具体的には以下の二点に着目する。一点目は、親密関係における依存経験である。本研究では、(a) パートナーへの依存度と、(b) パートナーからの依存度についてカップルの双方に調査を行う。個人内の(a) と(b) の認知の不均衡や、当事者同士が認知する(a) と(b) の不均衡が、勢力の大きさ認知に影響する可能性がある。二点目は、パートナーに優位に立たれる経験（例えばパートナーから指示を受ける経験など）である。性差別的態度を持つ者にとって、パートナーの優位性を表す経験は精神的ダメージとなり、結果として自己の勢力知覚にネガティブな影響が生じる可能性がある。第二に、Cross et al. (2019) の研究結果は IPV 研究にとって新しい知見であるがゆえに、科学研究において重要な要素である再現可能性についての検討が十分になされていない点である。特に、性役割や性役割に対する信念には、文化や地域性の影響が多分に含まれる。したがって知見の頑健性を確かめるためにも、文化的・地理的に異なる日本において同様の結果が得られるか検証する必要がある。

## 2. 2. 社会的関係と親密関係における暴力

家族や友人、同僚などのインフォーマルな社会的関係は、IPV 加害や被害の保護要因として作用するのだろうか。IPV の中でも、特にデート暴力が生じる関係は未婚の交際関係であり、私的な関係の意味合いが強い。それゆえに、民事不介入を原則とする公的機関は事前の予防的介入が難しい。そうした背景を考慮して、インフォーマルな社会的関係にある第三者に何ができるのかを明らかにすることには意義がある。

社会的関係という意味で、ソーシャル・サポートと IPV 被害とが関連する可能性はこれまでも示されている。例えば、Richards & Branch (2012) は大学生を対象とした調査から、友人からのサポートレベルの高い大学生ほどデート暴力の被害経験が少ないことを明らかにしている。また、Richards, Branch, & Ray (2014) では、5 年間隔の縦断調査を通して、一時点目の友人からのソーシャル・サポートが二時点目での被害の少なさと関連することを報告している。さらに、Rodrigues, Hébert, & Philibert (2022) は、近隣のソーシャル・サポートの多い女性は、そうでない女性と比較して、交際相手への心理的攻撃が少ないことを明らかにしている。以上を踏まえると、ソーシャル・サポートは IPV の保護要因と考えることが可能である。

一方、ソーシャル・サポートのように第三者の積極的な関与やサポートだけではなく、社会的関係が存在する事実や他者に認められている感覚自体が、IPV 被害を低減する可能性も考えられる。この点に関して、Lanier & Maume (2009) は従来の犯罪学理論をベースに、社会的結び付きが IPV の低減にとって重要であることを議論している。また、Coker et al. (2000) でも、他者からの積極的なサポートだけではなく、礼拝への参加のような社会的交流の頻度が多いほど、IPV が緩和されることが示されている。さらに、Rodrigues et al. (2023) は、社会参加の高さと交際相手への心理的攻撃との関連性を検討し、両性共に社会参加の多さと心理的攻撃加害のリスクの高さが関連することを示している。以上から、社会的参加もまた IPV 加害並びに被害と何らかの関連があることは疑いがない。

それでは、なぜ社会的関係が IPV 加害や被害と関連するのであろうか。その理由の一端は、他者からの孤立が我々の生存を脅かすリスクになるためである。実際、我々の生命維持にとって重要な身体的痛みと、社会的関係の欠如から生じる社会的痛みとが類似の神経基盤を有している。つまり、身体的痛みが生命の危機への警報であるのと同様に、社会的痛みが社会的関係の欠如を表す兆候に警報として作用しているのである (Eisenberger & Lieberman, 2004)。このように、我々が快適に生きるためには、社会的関係が安定的に存在することが重要である。

この点は、先行研究からも明らかである。例えば、Baumeister & Leary (1995) は社会的排斥に関する研究をレビューし、社会的排斥や孤独感、あるいは所属欲求の欠乏が、精神的問題や身体的問題を引き起こすとしている。また、Cacioppo & Hawkley (2009) は、社会的に孤立し、孤独感が強いほど、否定的で抑うつ的な認知が増え、自己破滅的な社会的認知に対する確証バイアスを働かせやすいという。さらに、Gover (2004) は、社会的結び付きの低下はリスクな行動を増加させ、それがデート暴力被害を助長するという。実験的にも、Twenge, Catanese, & Baumeister (2002) は、パーソナリティ検査から予測される今後の人生として、晩年を一人で終えるタイプで、今後も友人に恵まれず、結婚生活も長続きしないだろうと示した場合、それと反対の内容を示した場合や排斥とは関係のないネガティブな将来を示した場合よりも、自己破滅的でリスクな選択したり、不健康な行動を選択したりすることが示されている。

一方で、こうした社会的関係に影響を与える要因として、研究 1 でも取り上げる勢力欲求、あるいは支配欲求が考えられる。先に示した通り、勢力欲求は相手を支配できるほどの大きな勢力を所有したいという欲求であり、こうした欲求を持つほど相手の人間関係すらも支配しよ

うとすると考えてもおかしくない。実際、Follingstad et al. (2002) は、支配欲求を関係コントロール欲求として捉え、これが暴力や心理的攻撃加害をもたらす可能性について議論している。したがって、社会的関係を考えるにあたって、その前段階のパーソナリティ要因として支配欲求を設定し、これらの要因が社会的関係を介して、親密な関係における暴力をもたらす過程を研究2において明らかにすることとした。

なお、研究2の仮説モデルとしては、これまでの議論を踏まえ、支配欲求が社会的関係の欠如をもたらし、社会的関係の欠如によって関係満足度の低下や孤独感の増進が生じ、それが心理的攻撃加害をもたらすと仮定した。本研究では、こうした仮説モデルを設定した上で、Webを用いた縦断的な調査を実施し、支配欲求や社会的関係とIPV加害との関連を、時系列を踏まえた上で検討することを第二の目的とする。

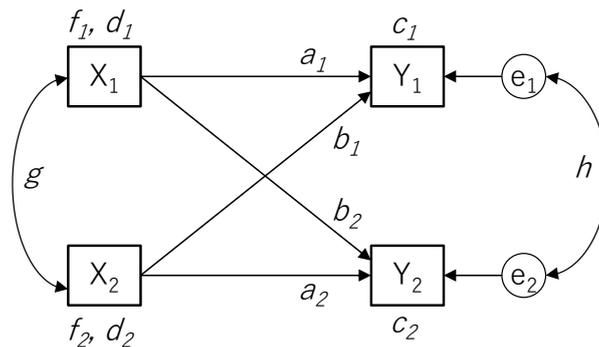
Covid-19の広まりに伴い、日本社会では密集を避け、自宅に待機するような厳しい対応が求められた。日常生活から他者を排除することで、家庭という親密空間をより閉鎖的な空間へと変容させた可能性がある。これは犯罪研究では難しい問題である。例えば、日常活動理論(Cohen & Felson, 1979)では、犯意ある行為者(DV加害者)、ふさわしい対象(家庭内での弱者)、そして有能な監視者の不在(家庭外の第三者)がそろった状況で犯罪が生じると考える。この理論に基づけば、他者を家庭から排除するような状況は、問題に対する有能な監視者を遠ざけることにつながり、結果的に問題を助長することが予想される。実際、内閣府男女共同参画局の調査によれば、Covid-19下のDV相談件数は増加しており、全国の配偶者暴力相談支援センター等に寄せられた相談件数は、2020年は19万0,030件で、2019年度比で約1.6倍に増加したという(内閣府男女共同参画局, 2021a)。このような社会状況において、本研究を実施することは極めて時宜を得た研究であると考えられる。

### 2. 3. Actor-Partner Interdependent Model

本研究の方法論的な特徴は二つある。一つ目の特徴は、縦断研究を行うところである。横断的な調査の限界点として、厳密には因果関係までは分からない点が挙げられる。本研究ではこうした限界点を克服するために、2回にわたる追跡調査を行い、説明変数を事前に測定した上で、目的変数は2回目の調査で測定する。このように縦断的な追跡調査を行うことで、時系列的にも因果関係を特定できると思われる。二つ目の特徴は、親密関係(本研究の場合、婚姻関係)のペア相互の作用を分析するために、Actor-Partner Interdependent Model (APIM; Kenny, 1996)を用いる点である。APIMは、二者関係における変数の関係性をActor効果とPartner効果に分離させる方法である(清水, 2014)。Actor効果は、個人の説明変数が自身の結果変数に与える効果であり、Partner効果は個人の説明変数がペアとなる相手の結果変数に与える効果である(浅野・五十嵐, 2015)。Olsen & Kenny (2006)に基づくと、APIMはFigure 1のようにモデル化することが可能である。Figure 1では、a1とa2がActor効果、b1とb2がPartner効果である。以上に加えて、モデル中の他のパラメータは、予測変数の平均(f1とf2)と分散(d1とd2)、結果の切片(c1とc2)と残差分散(e1とe2)、予測変数の間の共分散(g)と結果の残差

共分散 ( $h$ ) が表示されている。本研究では、夫婦ペアデータという識別可能なケースとして、APIM を用いることとした。それによって、夫婦双方の心理的攻撃加害を一括して扱うことができるだけでなく、親密関係における一方の加害に対して他方がどのような影響を及ぼしているのか、相互関係の視点から加害の発生メカニズムを明らかにすることが可能である。

Figure 1 Actor-Partner Interdependent Model (Olsen & Kenny (2006) に基づいて作成)



### 3. 研究1：性差別的態度と親密関係における暴力

研究1では、敵意的性差別的態度、親密関係における勢力感認知、IPV加害との関連性を検討するために、既婚異性カップルを対象として2回（Time1：2022年12月、Time2：2023年3月）の縦断的なWeb調査を実施した。研究1の第1の目的は、先行研究に基づいて、親密関係における自己の勢力の大きさ認知（厳密には、“自己の勢力の大きさ”に対する認知の歪み）に注目し、それが親密関係における暴力に及ぼす影響を複数の研究を通して明らかにすることであった。以上のほか、APIMを用いて、2波のデータを解析することによって、既婚の異性カップルの両者の影響を統制した上で、支配欲求や関係満足度がIPV加害に及ぼす影響を、時系列を踏まえて検討することを第2の目的とした<sup>1</sup>。

#### 3. 1. 方法

##### 3. 1. 1. 調査対象者<sup>2</sup>

分析1については、Time 1調査で得られた既婚の異性カップル612組（約1,224名）を分析対象とした。分析2については、Time 2のデータまでを含めて分析対象とした。Time 2では

<sup>1</sup> 研究1の第一の目的に関する解析は、東北大学大学院文学研究科の鈴木沙央理氏が解析を行ったものである。また、第二の目的に関しては、研究代表者が解析を行った。それぞれ分析を行った責任主体が異なるため、以下では分析1（第一の目的に関する分析）と分析2（第二の目的に関する分析）を分けて記載する。

<sup>2</sup> 調査対象者に関する記述のうち、Time 2に関する文章（2行目以降の文章）は研究代表者がTime 2のデータを取得した上で年齢などを算出し作成したものである。

Time 1 の調査で回答が得られたペアに調査を依頼し、309 組（約 618 名）から回答を得た。そのうち、パートナーが 3 か月前の調査と同様のカップル 304 組（合計 608 名；男性 304 名，平均年齢 36.97 ( $SD=8.17$ ) 歳；女性 304 名，平均年齢 35.35 ( $SD=7.75$ ) 歳）から得られた回答を分析対象とした。Time 2 の回答者については、3 か月前の調査とは異なるパートナーがいる者（1 名），現在パートナーがいない（4 名）は，ペアで 2 回の調査データが得られていないことから分析から除外した。Time 1 までの交際継続期間は，男性が回答した値で 128.70 ( $SD=82.45$ ) ヶ月であった（女性が回答した値で 127.82 ( $SD=83.13$ ) ヶ月であった。なお，本研究では既婚の異性カップルの双方に関係継続期間を尋ねているため，関係継続期間について二つの値が出現する。男女で交際期間にずれが生じるのは，関係の開始時期に意見の相違が見られるほか，記憶違いなどが混入しているものと思われる。ただし，値としては非常に近い値であったため，本最終報告では男性を基準とした場合の値を用いることとした。なお，当初の計画では，未婚の異性カップル 300 組（約 600 名）も対象者とする予定であったが，実査までの過程で Web 調査の一回当たりの費用の高騰に伴って予算的に未婚の異性カップルから回答を得ることが困難であることが明らかとなった。そこで，安定的に回答が得られる可能性が高い，既婚の異性カップルのみを調査対象とすることとした。

### 3. 1. 2. 調査手続き

本研究では，調査会社（株）マクロミル）を用いて婚姻関係にあるペアの双方に対して縦断的な Web 調査を実施した。具体的には，Time 1 でマクロミルが保有するモニタにスクリーニング調査を行い，婚姻関係にあるモニタのみを抽出した。その上で，モニタとその配偶者の双方が調査に参加可能な対象者にのみに Time 1 の本調査への参加を依頼した。Time 1 の本調査では，まず調査に関する倫理的配慮などの説明を行った上で，モニタとその配偶者の双方が回答できる者のみを対象とすることを伝え，質問項目に回答を求めた。回答は，まずマクロミルのモニタに一連の質問への回答を求め，その後，モニタの配偶者にも同じ一連の質問に回答を求めた。Time 2 は，Time 1 の 3 か月後に，Time 1 に回答したモニタに対して再度研究協力をお願いを Web 上で送付した。その上で，協力への同意が得られたモニタに本調査を提示し，質問に回答を求めた。Time 2 の本調査は，Time 1 の本調査と同様に実施した。調査の実施時期は，Time 1 が 2022 年 12 月，Time 2 が 2023 年 3 月であった。

### 3. 1. 3. 測定内容

Time 1 では，親密関係（配偶者との関係）に関する質問（婚姻相手のイニシャル，モニタと配偶者の年齢，交際期間など）のほかに，以下の測定尺度を使用した。なお，以下の尺度に関しては，夫婦の両方にそれぞれ別に回答を求め，両回答が一組のカップルの回答として紐づけられるようにした。

#### （1）性差別的態度

Glick & Fiske（1996）の Ambivalent Sexism Inventory（ASI）を宇井・山本（2001）が日本語版

に翻訳した両面価値的性差別主義尺度（22項目，7件法）。

#### （2）親密関係における勢力感認知

Anderson et al. (2012) の *Sense of Power Scale* を森永他 (2019) が日本語訳した尺度を，現在の婚姻関係に置き換えて回答を求めた（7件法）。本尺度については，回答者本人の勢力感（8項目），回答者から見たパートナーの勢力感（8項目）の両者を測定した。加えて，親密関係における勢力感認知として，回答者とパートナーのどちらの方が関係の中で影響力が強いと思うかについて，別途，一項目で回答を求めた（7件法）。

#### （3）親密関係における勢力欲求

現在の親密関係において，（2）で使用した8項目を達成することが，どのくらい重要かについて回答を求めた（8項目，7件法）。

#### （4）親密関係における被依存度／依存度認知

精神的被依存度認知を測定するために，伊藤・相良（2012）の愛情次元尺度から，パートナーからの配慮，関心，理解，サポートの認知に関する項目を使用した（8項目；7件法）。また，精神的依存度の認知を測定するために，精神的被依存度の項目をパートナーの行動に置き換えて評定するように求めた（8項目；7件法）。加えて，親密関係における相対的・絶対的被依存度として，回答者とパートナーのどちらの方が関係の中で貢献度が高いと思うかについて，別途，一項目で回答を求めた（7件法）。

#### （5）現在の親密関係における関係満足度

Rusbult et al. (1998) の *Investment Model Scale* を古村他 (2013) が邦訳した邦訳版投資モデル尺度から関係満足度を測定する5項目を使用した（7件法）。

#### （6）親密関係における暴力加害・被害

10-item short form of conflict in adolescent dating and relationship inventory (CADRI-S ; Fernández-González et al., (2012) を Souma et al (2022) が日本語訳した尺度を使用した（10項目；4件法）。本研究では，各項目をパートナーに行った経験（加害経験），各項目をパートナーから受けた経験（被害経験）の両方に回答を求めた。

Time 2 では，Time 1 の測定内容から属性項目や性差別的態度を除外したほかは全て同じ尺度を使用した。なお，関係満足度，親密関係における暴力加害の尺度の詳細については，研究 2 に記載されている。

### 3. 2. 結果と考察（分析1）<sup>3</sup>

第一の目的を検証するために，Time 1 のデータを用いた分析を行った。性差別的態度，親密関係における勢力感認知，IPV 加害との関連性を検討することを目的に，構造方程式モデリン

---

<sup>3</sup> 本報告書における分析1に関する内容は，東北大学大学院文学研究科の鈴木沙央理氏が文学研究科に提出した2022年度修士論文の内容に関して，文意が損なわれない程度に研究代表者が修正したものである。

グによるパス解析を行った。この際、勢力欲求得点から勢力感知得点を引いた値を、勢力に対する欲求不満得点として算出した（この得点が高いほど、親密関係において勢力に対する欲求不満が高いことを表す）。また、精神的被依存認知得点から精神的依存認知得点を引いた値を、相対的・精神的被依存認知得点とした（この得点が高いほど、親密関係においてパートナーから依存されていることを表す）。分析の結果を Figure 2 に示した。

モデルの適合度は良好であった。まず、敵意的性差別的態度が強いほど、勢力に対する欲求不満が高まり、結果的に IPV 加害が増えていた。また、敵意的性差別的態度が強いほど、相対的・精神的被依存性認知が高まり、それが勢力に対する欲求不満を高めることを介して、IPV 加害に結び付いていた。加えて、相対的・精神的被依存性認知が高まるほど、勢力に対する欲求不満が高まり、それが関係満足度を低下させることを介して、IPV 加害へと結びついていた。

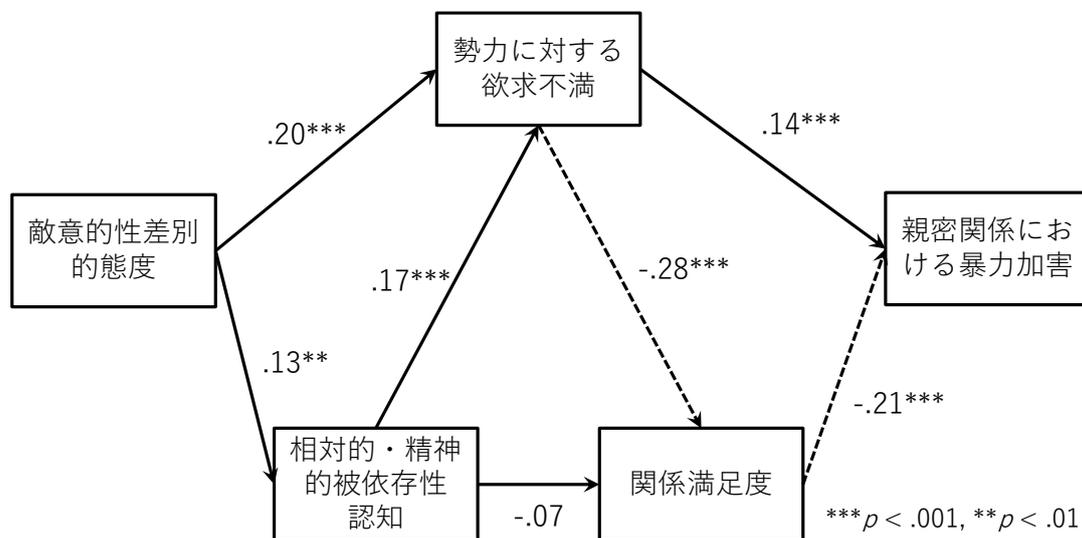


Figure 2. 構造方程式モデリングによるパス解析の結果

### 3. 3. 結果と考察（分析 2）<sup>4</sup>

分析 2 を行うにあたり、Time 1 と Time 2 のデータをマッチングした上で基本的情報を示す。

#### 3. 3. 1. 調査対象者の属性

Time 1 の情報に基づき、調査対象者の属性を男女別に計数した結果を Table 1 に示した。男性では 8 割以上が常勤の会社員であり、女性では常勤の会社員が 4 割程度、非常勤社員・パートと専業主婦がそれぞれ 3 割程度であった。収入については、個人年収を計数したところ、男性では 200 万円から 600 万円未満で 5 割以上を占めていた。女性では収入なしが最も多く、次いで 100 万円未満であった。また 100 万円から 600 万円未満まででほとんどの対象者が含まれていた。最終学歴については、両性共に大学卒が最も多く 4 割以上を占めていた。次に多いの

<sup>4</sup> 3.3 以降は研究代表者が分析を行い、文章を作成したものである。

は、男性では高等学校卒が2割、女性では専門学校・短期大学卒が2割程度であった。これらの二つ（男性では大学卒と高等学校卒、女性では大学卒と専門学校・短期大学卒）で7割程度を占めていた。また、調査対象者の属性として、これまでに交際した相手の数を尋ねたところ、男性では4.04 ( $SD=2.77$ ) 人であり、女性では3.95 ( $SD=3.57$ ) 人であった。さらに、子どもの有無について夫婦単位で尋ねたところ、子どもがいる夫婦は24.3% (304組中74組) であった。さらにまた、同棲の有無についても夫婦単位で尋ねたところ、同棲をしている夫婦が95.4%、別居している夫婦が3.6%、その他が1.0%であり、ほとんどの夫婦が同棲の状態であった。

Table 1 研究1 (分析2) における調査対象者の属性

職業	男性 ( $N = 304$ )		女性 ( $N = 304$ )	
	度数	%	度数	%
常勤社員	262	86.2	111	36.5
非常勤社員・パート	15	4.9	82	27.0
自営業	11	3.6	7	2.3
専業主婦・専業主夫	2	0.7	1	0.3
無職	13	4.3	95	31.3
その他	1	0.3	4	1.3
収入(個人年収)				
収入なし	7	2.3	74	24.3
100万円未満	12	3.9	63	20.7
100万円～200万円未満	12	3.9	36	11.8
200万円～400万円未満	67	22.0	59	19.4
400万円～600万円未満	100	32.9	43	14.1
600万円～800万円未満	53	17.4	11	3.6
800万円以上	30	9.9	7	2.3
わからない	23	7.6	11	3.6
最終学歴				
中学校	12	3.9	12	3.9
高等学校	74	24.3	77	25.3
専門学校・短期大学	60	19.7	80	26.3
大学	134	44.1	123	40.5
大学院	24	7.9	12	3.9

### 3. 3. 2. 各尺度の基本的検討

次に、本研究で使用した各尺度の信頼性について検討を行った。なお、Time 1 並びに Time 2 の両方で同様の尺度に回答を求めているが、煩雑さを避けるために中心的な分析である APIM に使用した変数についてのみ報告する。また、本研究では夫婦の双方に質問を行っているため、男性と女性のそれぞれの値について報告した。

まず、Time 1 で測定した各尺度について尺度の信頼性を検討した。Time 1 で測定した関係満足度については、男性で  $\alpha = .96$  ( $Mean = 5.30$ ,  $SD = 1.35$ ) であり、女性で  $\alpha = .94$  ( $Mean = 5.09$ ,

$SD=1.33$ )であった。また、Time 1 で測定した親密関係における勢力欲求については、男性で  $\alpha = .89$  ( $Mean = 4.11, SD = 1.08$ ), 女性で  $\alpha = .90$  ( $Mean = 4.46, SD = 1.05$ ) であった。

次に、Time 2 で測定した CADRI-S について尺度の信頼性を検討した。その結果、男性で  $\alpha = .92$  ( $Mean = 1.16, SD = 0.37$ ) であり、女性で  $\alpha = .90$  ( $Mean = 1.20, SD = 0.38$ ) であった。また、CADRI-S については、左に歪んだ分布であると予想されたため歪度と尖度を算出した。その結果、男性では歪度 = 3.53, 尖度 = 13.20, 女性では歪度 = 3.30, 尖度 = 11.78 であった。そこで、これらの分布を踏まえて、CADRI-S については得点を対数変換した値を以降の分析で用いることとした。

以上の通り、尺度の内的一貫性については、いずれの尺度においても問題がないことを確認した上で以降の分析を行った。

### 3. 3. 3. 各尺度の関連性の検討

次に、本研究で使用した各尺度の関連性を検討するために、各変数間の Pearson の積率相関係数を算出した。本研究では、Time 1 と Time 2 の両方で同様の尺度に回答を求めているが、本分析でも、煩雑さを避けるために中心的な分析である APIM に使用した変数のみ報告した。また、本研究では夫婦の双方に質問を行っているため、男性と女性の各値について報告した。分析の結果を Table 2 に示した。

Table 2 関係満足度、勢力欲求、心理的攻撃加害の相関係数

	1)	2)	3)	4)	5)	6)
男性						
1) 関係満足度(t1)	—	-.07	-.21 **	.76 **	.06	-.18 **
2) 勢力欲求(t1)		—	.12 *	-.07	.39 **	.04
3) 心理的攻撃加害(t2)			—	-.29 **	-.04	.54 **
女性						
4) 関係満足度(t1)				—	.08	-.22 **
5) 勢力欲求(t1)					—	.04
6) 心理的攻撃加害(t2)						—

注) t1は1時点目で測定した変数, t2は2時点目で測定した変数である。\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ 。

まず、性別内での関連性を検討すると、男性では、Time 1 の関係満足度と Time 2 の心理的攻撃加害との間に、統計的に有意な負の相関が見られた。また、男性では Time 1 の勢力欲求と Time 2 の心理的攻撃加害との間に統計的に有意な負の相関が見られた。一方、女性では、Time 1 の関係満足度と Time 2 の心理的攻撃加害との間に、統計的に有意な負の相関が見られた。

次に、性別間での関連性を検討すると、男性の Time 1 の関係満足度と女性の Time 1 の関係満足度、男性の Time 1 の勢力欲求と女性の Time 1 の勢力欲求との間、そして男性の Time 2 の心理的攻撃加害と女性の Time 2 の心理的攻撃加害との間に、それぞれ統計的に有意な正の相関が見られた。また男性の Time 1 の関係満足度と女性の Time 2 の心理的攻撃加害、女性の Time 1 の関係満足度と男性の Time 2 の心理的攻撃加害との間に、それぞれ統計的に有意な負の相関が見られた。

以上の結果を踏まえると、男女ともに関係に満足度が高いほど、自身の心理的攻撃加害が少ないということが言える。また、特に男性では勢力欲求が強いほど、心理的攻撃を多く行うと考えられる。さらに、性別間での関係でも、両性共に関係に満足度を強く感じているほど、相手の心理的攻撃加害が少ないと考えられる。

### 3. 3. 4. 関係満足度並びに勢力欲求が親密関係での心理的攻撃に及ぼす影響

分析 2 では、夫婦双方の関係満足度並びに勢力欲求が親密関係における心理的攻撃に影響するかどうかを検討することを目的とした。この際、本研究では、ペアレベルのデータを測定し、ペアの双方の影響を考慮した分析を行うこととした。具体的には、関係満足度並びに勢力欲求と心理的攻撃加害との関係性を、男性と女性の双方のペアデータを用いて APIM を適用して解析した。Actor 効果と Partner 効果の推定には構造方程式モデリング (Structural Equation Modeling; SEM) を用いた。分析には AMOS26 を使用し、ペアレベルのデータに関して、最尤推定法を用いて推定を行った。分析結果の詳細を Table 3 に示した。

Table 3 研究 1 における APIM による分析結果

Actor効果			非標準化 推定値	標準誤差	標準化 推定値	$p$
男性	男性					
関係満足度 (t1)	→ 心理的攻撃加害 (t2)		0.00	0.01	.02	.814
勢力欲求 (t1)	→ 心理的攻撃加害 (t2)		0.01	0.01	.13	.029
女性	女性					
関係満足度 (t1)	→ 心理的攻撃加害 (t2)		-0.02	0.01	-.20	.018
勢力欲求 (t1)	→ 心理的攻撃加害 (t2)		0.01	0.01	.05	.380
Partner効果						
男性	女性					
関係満足度 (t1)	→ 心理的攻撃加害 (t2)		0.00	0.01	-.03	.767
勢力欲求 (t1)	→ 心理的攻撃加害 (t2)		0.00	0.01	.00	.965
女性	男性					
関係満足度 (t1)	→ 心理的攻撃加害 (t2)		-0.02	0.01	-.29	<.001
勢力欲求 (t1)	→ 心理的攻撃加害 (t2)		-0.01	0.01	-.07	.234

注) t1は1時点目で測定した変数, t2は2時点目で測定した変数である。

まず、Actor 効果については、男性の Time 1 での勢力欲求が男性の Time 2 での心理的攻撃加害を促していた。また女性の Time 1 での関係満足度は女性の Time 2 での心理的攻撃加害を抑制していた。これらの結果は、男女では親密な関係において心理的攻撃加害を行う理由が異なる可能性を示唆するものであるだろう。

一方、Partner 効果については、女性の Time 1 での関係満足度が男性の Time 2 での心理的攻撃加害を抑制していた。すなわち、女性の Time 1 での関係満足度は自らの心理的攻撃を抑制するだけではなく、相手の心理的攻撃加害をも抑制すると考えられる。

本研究では、分析 1 において勢力に対する欲求不満が心理的攻撃加害を促進し、関係満足度が逆に心理的攻撃加害を抑制することを明らかにした。一方で、分析 2 の結果を踏まえると、必ずしも男女で同じメカニズムによって心理的攻撃加害が生じているわけではないと思われる。研究 2 では、これらの点を踏まえつつ、さらに Covid-19 によって否応なしに変化が求められた社会的関係を踏まえて、より詳細に心理的攻撃加害が生じるメカニズムについて分析する。

#### 4. 研究 2 : 社会的関係と親密関係における暴力

研究 2 では、先行研究に基づき、個人特性としての支配欲求並びに社会的関係と IPV 加害の関連を検討した。具体的には、支配欲求の高まりは、関係内での社会的関係に影響し、その社会的関係が IPV 加害と関連すると仮定し、この仮定を検討することを目的に既婚異性カップルを対象として 2 回 (Time1 : 2023 年 7 月, Time 2 : 2023 年 9 月) の縦断的な Web 調査を実施した。なお、社会的関係の指標としては、ソーシャル・サポート、社会的交流、孤独感を取り上げた。研究 1 の分析 2 と同様に、研究 2 でも APIM を用いて 2 波のデータを解析することによって、既婚の異性カップルの両者の影響を統制した上で、支配欲求並びに社会的関係が IPV 加害に及ぼす影響を、時系列を踏まえて検討することとした。

##### 4. 1. 方法

###### 4. 1. 1. 調査対象者

Time 1 の調査では既婚の異性カップル 826 組 (合計 1,652 名) から回答を得た (男性 826 名, 平均年齢 36.73 ( $SD=8.02$ ) 歳 ; 女性 826 名, 平均年齢 35.31 ( $SD=7.61$ ) 歳)。Time 1 までの交際継続期間は、男性が回答した値で 132.01 ( $SD = 84.43$ ) ヶ月であった (女性が回答した値で 132.30 ( $SD=83.65$ ) ヶ月であった。なお、本研究では既婚の異性カップルの双方に関係継続期間を尋ねているため、関係継続期間について二つの値が出現する。男女で交際期間にずれが生じるのは、関係の開始時期に意見の相違が見られるほか、記憶違いなどが混入しているものと思われる。ただし、値としては非常に近い値であったため、本最終報告では男性を基準とした場合の値を用いることとした。Time 2 では Time 1 の調査で回答が得られたペア (826 組) に調査を依頼し、パートナーが 2 か月前の調査と同様のカップル 612 組 (合計 1,224 名 ; 男性 612 名, 平均年齢 37.12 ( $SD=7.98$ ) 歳 ; 女性 612 名, 平均年齢 35.48 ( $SD=7.57$ ) 歳) から得られた回答を分析対象とした。Time 2 の回答者については、2 か月前の調査とは異なるパートナー

がいる者（4名）、現在パートナーがいない（2名）は、ペアで2回の調査データが得られていないことから分析から除外した。なお、研究1同様、当初の計画では未婚の異性カップルも対象者とする予定であったが、Web調査の一回当たりの費用の高騰に伴って予算的に未婚の異性カップルから回答を得ることが困難であることが明らかとなった。そこで、安定的に回答が得られる可能性が高い、既婚の異性カップルのみを調査対象としてできるだけサンプル数を多くすることとした。

#### 4. 1. 2. 調査手続き

研究1と同様に、研究2では調査会社（株）マクロミルを用いて婚姻関係にあるペアの双方に対して縦断的なWeb調査を実施した。なお、研究2の調査対象者を募集する際には、研究1に参加した回答者は除外するように調査会社に依頼した。調査の具体的な手続きは、Time1でマクロミルが保有するモニタにスクリーニング調査を行い、異性と婚姻関係にあるモニタのみを抽出した。その上で、モニタとその配偶者の双方が調査に参加可能な対象者にTime1の本調査への参加を依頼した。なお、同性のカップルを対象としなかったのは、異性のカップルと同性のカップルでは、本研究が対象とする心理的メカニズムが異なる可能性があるためである。また、サンプルサイズをできるだけ多くすることを念頭に置いていたため、異性のカップルに限定した調査を実施した。この点に関しては、今後、同性のカップルについても検討を行う必要がある。Time1の本調査では、まず調査に関する倫理的配慮などの説明を行った上で、モニタとその配偶者の双方が回答できる者のみを対象とすることを伝え、質問項目に回答を求めた。回答は、まずマクロミルのモニタに一連の質問への回答を求め、その後、モニタの配偶者にも同じ一連の質問に回答を求めた。Time2は、Time1の2か月後に、Time1に回答したモニタに対して再度研究協力をお願いをWeb上で送付した。その上で、協力への同意が得られたモニタに本調査を提示し、質問に回答を求めた。Time2の本調査は、Time1の本調査と同様に実施した。調査の実施時期は、Time1が2023年7月、Time2が2023年9月であった。

#### 4. 1. 3. 測定内容

Time1では、親密関係（配偶者との関係）に関する質問（婚姻相手のイニシャル、モニタと配偶者の年齢、交際期間など）のほかに、以下の測定尺度を使用した。なお、以下の尺度に関しては、夫婦の両方にそれぞれ別に回答を求め、両回答が一組のカップルの回答として紐づけられるようにした。Time2では、Time1の測定内容から一部の属性に関する質問を除外したほかは全て同じ尺度を使用した。

##### （1）現在の親密関係における関係満足度

現在の親密関係（本研究の場合、夫婦関係）における関係満足度を測定するため、Rusbult, Martz, & Agnew（1998）が作成したInvestment Model Scaleを古村・仲嶺・松井（2013）が日本語に翻訳した投資モデル尺度のうち、関係満足度の下位因子を用いた。関係満足度の下位因子は、「私は、自分たちの関係に満足している」、「自分たちの関係は、私をととても幸せにしてくれる」、「自

分たちの関係は、他の人たちの関係よりもずっと良いものだ」、**「自分たちの関係は理想に近いものだ」**、そして**「自分たちの関係は、人と親しくしていきたいという私の気持ちを満たしてくれる」**のように、現在の親密関係（本研究の場合、夫婦関係）における満足度を測定する5項目から構成される。回答は、各質問項目について、内容が自分に当てはまる程度に**「1. 全くあてはまらない」**から**「7. 非常にあてはまる」**までの7段階で回答を求めた。

### (2) 親密関係における支配欲求

親密な関係における支配欲求の尺度として **Intimate Partner Violence Control Scale** (以下、**IPVCS** とする; Bledsoe & Sar, 2011) を相馬他 (2019) が翻訳した尺度を使用した。IPVCS は、普段の親密関係にある相手（配偶者や恋人）との付き合いの中で、相手を支配しようとする行動をどの程度行うかを測定するものである。IPVCS は全 16 項目を 5 つのブロックに分けて尋ねる尺度である。まず第 1 ブロックでは、**「パートナーに対して、次のことを聞いてみたいと思うことがあるか」と**教示を行った上で、**「パートナーの友達が誰かということ」**、**「パートナーはその友達とどんなことをするのか」**の 2 項目に回答を求めた。第 2 ブロックでは、**「パートナーに次のようにしてほしいと望むことがありますか」と**教示を行った上で、**「パートナーが実家の家族と会話したり一緒に過ごしたりすることに時間をかけないでほしい」**、**「普段の物事をただ決められた通りにしてほしい」**の 2 項目に回答を求めた。第 3 ブロックでは、**「次のようになればよいと思うことがありますか」と**教示を行った上で、**「パートナーが仕事をやめたり、やめさせられたりする」**、**「私の許しなくパートナーが出かけられないようにできる」**、**「パートナーの居場所を常に私が把握できる」**などの 6 項目に回答を求めた。第 4 ブロックでは、**「パートナーに次のようにしてほしいと望むことがありますか」と**教示を行い、**「お金の使い道について、パートナーにあまり口を出さないでほしい」**、**「パートナーは私にお金を要求されることに不満を言わないでほしい」**の 2 項目に回答を求めた。そして、第 5 ブロックでは、**「次のようにできれば、と思うことがどれくらいありますか」と**教示を行った上で、**「パートナーの日々の過ごし方をより私の望むものにしておく」**、**「私の話を聞いてもらうため、別れるとパートナーを脅かさなくても、パートナーが私の話を聞いてくれるようになる」**などの 4 項目に回答を求めた。回答方法は、各項目について、現在のパートナーとの関係においてそのような経験をしたことがどれくらいあるかに、**「1. まったくない」**から**「5. よくある」**までの 5 段階で回答を求めた。

### (3) ソーシャル・サポート (Social Support)

回答者の認知しているソーシャル・サポートの量を測定するために、Zimet et al. (1988) が作成した **Multidimensional Scale of Perceived Social Support** を、岩佐他 (2007) が日本語に翻訳したソーシャル・サポート尺度を使用した。本尺度は、家族のサポート、大切な人のサポート、友人のサポートの 3 つの下位因子から構成される尺度である。家族のサポートについては、**「私の家族は本当に私を助けてくれる」**、**「私は家族と自分の問題について話し合うことができる」**などの 4 項目で構成されている。大切な人のサポートについては、**「私には困ったときにそばにいてくれる人がいる」**、**「私には真の慰めの源となるような人がいる」**などの 4 項目で構成されている。そして、友人のサポートについては、**「私の友人たちは本当に私を助けてくれようとする」**

る」,「私は自分の問題について友人たちと話すことができる」などの4項目で構成されている。回答方法は、各項目について、どの程度そのように思うかについて、「1. 全くそう思わない」から「7. 非常にそう思う」までの7段階で回答を求めた。

#### (4) 社会的孤立 (Social Isolation)

回答者の社会的孤立の程度を測定するために、社会的孤立の程度を測定できる Lubben Social Network Scale 短縮版 (LSNS-6) の日本語版 (栗本他, 2011) を使用した。本尺度は、Lubben (1988)が、高齢者の社会的孤立をスクリーニングする尺度として開発し、国際的に広く使用されている尺度である。高齢者を対象として作成された尺度であるが、項目内容から考えてより若年の対象者にも回答可能であることから、本研究でも社会的孤立の程度を測定する尺度として使用することとした。本尺度は、家族との関係、友人との関係を分けて尋ねる尺度である。家族との関係については、「少なくとも月に1回、会ったり話をしたりする家族や親戚は何人いますか?」、「あなたが、個人的なことでも話すことができるくらい気楽に感じられる家族や親戚は何人いますか?」、「あなたが、助けを求めることができるくらい親しく感じられる家族や親戚は何人いますか?」の3項目を尋ね、友人との関係については、「少なくとも月に1回、会ったり話をしたりする友人は何人いますか?」、「あなたが、個人的なことでも話すことができるくらい気楽に感じられる友人は何人いますか?」、「あなたが、助けを求めることができるくらい親しく感じられる友人は何人いますか?」の3項目を尋ねる。回答方法は、各項目について、そのような人が何人くらいいるかについて、「0. いない」から「5. 9人以上」までの6段階で回答を求めた。

#### (5) 社会的排斥 (Social Exclusion)

回答者が、現在どの程度社会的に排斥されていると考えているかを測定するために、社会的排斥に関する4項目に回答を求めた。具体的には、「他の人たちが、私のことを無視した」、「他の人たちが、私を会話に入れてくれなかった」、「他の人たちが、まるで私がそこにはいないかのように扱った」、「他の人たちが、私をさまざまな活動に誘ってくれなかった」の4項目であった。回答方法は、この2か月間の間に、各項目のような出来事を経験した頻度について、「1. 全くなかった」から「7. いつもあった」までの7段階で回答を求めた。

#### (6) 孤独感 (Loneliness)

回答者が、普段の生活の中でどの程度孤独感を感じているかを測定するために、Igarashi (2019)の Japanese version of the three-item loneliness scale を使用した。本尺度は、Hughes et al (2004)が作成した原版 (英語版) を日本語に翻訳した尺度であり、原版は単純な形式で孤独感が測定できるため幅広い研究で使用されてきた尺度である。本尺度は、「あなたは、自分に仲間付き合いがないと感じることがありますか」などの3項目から構成される尺度である。回答方法は、普段の生活の様々な場面でどのように感じているかを尋ねるものであることを示したうえで、各項目のように感じるものがどの程度あるかについて、「1. ほとんどない」から「3. よくある」までの3段階で回答を求めた。

#### (6) 親密関係における心理的攻撃加害 (IPV 暴力加害)

親密関係における心理的攻撃の加害の程度を測定するために、Fernández-González et al. (2012) が作成した Conflict in Adolescent Dating and Relationship Inventory の短縮版（以下、CADRI-S とする）を、Souma et al. (2022) が日本語訳した尺度を使用した。本尺度は、親密な関係において生じる心理的攻撃を測定する尺度であり、「トゲのあるもしくは意地悪な口調で相手に話しかけたこと」、「相手をけなして侮辱したこと」、「相手と友人たちとを敵対させようとして、友人たちに何か話したこと」などの 10 項目で構成されている。本研究では、CADRI-S を構成する 10 項目について、回答者がパートナーに行った経験（加害経験）について回答を求めた。回答方法は、Time1 の加害については、パートナーとの過去 1 年間の関係の中で、各項目のような行動を行った頻度について、「1. 一度もなかった」から「4. 頻繁にあった」までの 4 段階で回答を求めた（なお、倫理的配慮の観点から、「5. 答えたくない・わからない」を設定し、この選択肢を選んだ場合には欠損値として処理した）。Time 2 の加害については、基本的な回答方法は Time 1 と同様であるが、Time 1 調査から Time 2 調査までの間に、これらの行動をどの程度行ったかに回答を求めた。

## 4. 2. 結果と考察

### 4. 2. 1. 調査対象者の属性

Time 1 調査時点での情報に基づいて調査対象者の属性を、男女別に計数した結果を Table 4 に示した。研究 1 と同様に、両性共に常勤の社員である者が多かったが、特に男性では 8 割以上を占めており顕著であった。女性では常勤社員が 4 割程度、非常勤社員・パートと専業主婦がそれぞれ 2 割程度であった。収入について、個人年収をベースに計数したところ、男性では 200 万円から 600 万円未満で 50%以上を占めていた。女性については、収入なしから 400 万円から 600 万円未満まで、概ね均等であった。さらに、最終学歴については、両性共に、大学卒が最も多く 4 割以上を占めていた。特に男性では、大学卒が 5 割近い結果であった。次に多いのは、男性では高等学校卒が 2 割、女性では専門学校・短期大学卒が 3 割程度であった。これらの二つ（男性では大学卒と高等学校卒、女性では大学卒と専門学校・短期大学卒）で 7 割程度を占めていた。また、調査対象者の属性として、これまでに交際した相手の数を尋ねたところ、男性では 4.14 ( $SD=3.53$ ) 人であり、女性では 4.16 ( $SD=3.01$ ) 人であった。さらに、子どもの有無について夫婦単位で尋ねたところ、子どもがいる夫婦は 21.4% (612 組中 131 組) であった。さらにまた、同棲の有無についても夫婦単位で尋ねたところ、同棲をしている夫婦が 96.4%、別居している夫婦が 2.8%、その他が 0.8%であり、ほとんどの夫婦が同棲の状態であった。概して、研究 1 と研究 2 で概ね同質の回答を分析対象とした。

### 4. 2. 2. 各尺度の基本的検討

次に、本研究で使用した各尺度の信頼性について検討を行った。研究 1 と同様に、Time 1 と Time 2 の両方で同様の尺度に回答を求めているが、煩雑さを避けるために中心的な分析である APIM に使用した変数についてのみ報告する。また、本研究では夫婦の双方に質問を行って

Table 4 研究2における調査対象者の属性

職業	男性 (N = 612)		女性 (N = 612)	
	度数	%	度数	%
常勤社員	516	84.3	268	43.8
非常勤社員・パート	40	6.5	157	25.7
自営業	18	2.9	12	2.0
専業主婦・専業主夫	32	5.2	168	27.5
無職	3	0.5	5	0.8
その他	3	0.5	2	0.3
収入(個人年収)				
収入なし	29	4.7	131	21.4
100万円未満	22	3.6	110	18.0
100万円～200万円未満	24	3.9	83	13.6
200万円～400万円未満	131	21.4	127	20.8
400万円～600万円未満	210	34.3	77	12.6
600万円～800万円未満	83	13.6	25	4.1
800万円以上	55	9.0	14	2.3
わからない	58	9.5	45	7.4
最終学歴				
中学校	30	4.9	15	2.5
高等学校	138	22.5	140	22.9
専門学校・短期大学	121	19.8	193	31.5
大学	288	47.1	249	40.7
大学院	35	5.7	15	2.5

るため、男性と女性のそれぞれの値について報告した。

まず、Time 1 で測定した各尺度について尺度の信頼性を検討した。Time 1 で測定した IPVCS については、男性で  $\alpha = .93$  ( $Mean = 1.97$ ,  $SD = 0.77$ ) であり、女性で  $\alpha = .90$  ( $Mean = 2.12$ ,  $SD = 0.74$ ) であった。また、Time 1 で測定したソーシャル・サポートについては、下位因子ごとに尺度の信頼性を求めた。その結果、男性については、家族のサポートで  $\alpha = .92$  ( $Mean = 5.07$ ,  $SD = 1.42$ )、大切な人のサポートで  $\alpha = .92$  ( $Mean = 5.02$ ,  $SD = 1.43$ )、友人のサポートで  $\alpha = .92$  ( $Mean = 4.61$ ,  $SD = 1.50$ ) であった。女性については、家族のサポートで  $\alpha = .91$  ( $Mean = 5.14$ ,  $SD = 1.39$ )、大切な人のサポートで  $\alpha = .90$  ( $Mean = 5.04$ ,  $SD = 1.42$ )、友人のサポートで  $\alpha = .92$  ( $Mean = 4.57$ ,  $SD = 1.55$ ) であった。さらに、社会的孤立については、男性で  $\alpha = .87$  ( $Mean = 2.72$ ,  $SD = 0.99$ ) であり、女性で  $\alpha = .85$  ( $Mean = 2.82$ ,  $SD = 0.97$ ) であった。社会的排斥については、男性で  $\alpha = .94$  ( $Mean = 1.87$ ,  $SD = 1.27$ ) であり、女性で  $\alpha = .93$  ( $Mean = 1.86$ ,  $SD = 1.28$ ) であった。

次に、Time 2 で測定した各尺度について尺度の信頼性を検討した。関係満足度尺度については、男性で  $\alpha = .96$  ( $Mean = 5.10$ ,  $SD = 1.44$ ) であり、女性で  $\alpha = .96$  ( $Mean = 4.83$ ,  $SD = 1.56$ ) であった。また、孤独感については、男性で  $\alpha = .82$  ( $Mean = 1.32$ ,  $SD = 0.51$ ) であり、女性で  $\alpha = .86$  ( $Mean = 1.50$ ,  $SD = 0.60$ ) であった。最後に、CADRI-S で測定した親密関係における心

理的攻撃加害については、男性で  $\alpha = .92$  ( $Mean = 1.13, SD = 0.34$ ) であり、女性で  $\alpha = .92$  ( $Mean = 1.14, SD = 0.35$ ) であった。また、CADRI-S については、左に歪んだ分布であると予想されたため歪度と尖度を算出した。その結果、男性では歪度 = 4.16, 尖度 = 18.68, 女性では歪度 = 4.29, 尖度 = 20.15 であった。そこで、これらの分布を踏まえて、CADRI-S については得点を対数変換した値を以降の分析で用いることとした。

以上の通り、尺度の内的一貫性については、いずれの尺度においても問題がないことを確認した上で以降の分析を行った。

#### 4. 2. 3. 各尺度の関連性の検討

次に、本研究で使用した各尺度の関連性を検討するために、各変数間の Pearson の積率相関係数を算出した。本研究では、Time 1 と Time 2 の両方で同様の尺度に回答を求めているが、本分析でも、煩雑さを避けるために中心的な分析である APIM に使用した変数のみ報告した。また、本研究では夫婦の双方に質問を行っているため、男性と女性の各値について報告した。分析の結果を Table 5 に示した。

分析の結果、各性別内での Time 1 の IPVCS と Time 1 の家族のサポート、大切な人のサポート、友人のサポートとの間に、統計的に有意な負の相関がみられた。一方、Time 1 の両性共に、IPVCS とパートナーの Time 1 での家族のサポート、大切な人のサポート、友人のサポートとの間にも、統計的に有意な負の相関がみられた。これらの結果は、相関係数レベルでは、性別内で支配欲求とサポートの減少が関連しているだけではなく、双方の支配欲求が相手のサポートの減少とも関連することを示唆するものである。また、Time 1 の社会的孤立（得点が高いほど社会的に孤立していないことを表す）や社会的排斥については、男性では、Time 1 の IPVCS と Time 1 の社会的孤立との間に統計的に有意な負の相関がみられ、Time 1 の IPVCS と Time 1 の社会的排斥との間には統計的に有意な正の相関がみられた。一方、女性では、Time 1 の IPVCS と Time 1 の社会的排斥との間にも、統計的に有意な正の相関がみられた。同様に、男性の Time 1 の IPVCS については、女性の Time 1 の社会的孤立と統計的に有意な負の相関がみられ、女性の Time 1 の社会的排斥とは統計的に有意な正の相関がみられたが、女性の Time 1 の IPVCS については、男性の Time 1 の社会的排斥とのみ統計的に有意な正の相関がみられた。これらの結果は、それぞれ性別の支配欲求は自らの社会的排斥のみならず、相手の社会的排斥と結びついていること、特に男性では支配欲求が高いほど、相手の社会的孤立の感覚も強くなることを意味している。

次に、社会的関係（家族のサポート、大切な人のサポート、友人のサポート、社会的孤立、社会的排斥）と関係満足度、孤独感、心理的攻撃加害とに関する分析結果を各性別内でみると、Time 1 の家族のサポート、大切な人のサポート、友人のサポート、社会的孤立と Time 2 の関係満足度との間に統計的に有意な正の相関がみられ、これらの変数と Time 2 の孤独感や心理的攻撃加害との間にはおおむね統計的に有意な負の相関がみられた。同様に、各性別内でみると、Time 1 の社会的排斥は Time 2 の関係満足度と統計的に有意な負の相関がみられ、Time 2 の孤

Table 5 各変数と関係満足度, 孤独感, 心理的攻撃加害の相関係数

	1)	2)	3)	4)	5)	6)	7)	8)	9)	10)	11)	12)	13)	14)	15)	16)	17)	18)
男性																		
1) IPVCS(t1)	—	-.36 **	-.35 **	-.17 **	-.09 *	.49 **	-.32 **	.19 **	.24 **	.71 **	-.33 **	-.34 **	-.13 **	-.10 *	.42 **	-.26 **	.16 **	.17 **
2) 家族のサポート(t1)	—	.87 **	.67 **	.40 **	-.41 **	.54 **	-.22 **	-.22 **	-.31 **	.64 **	.62 **	.42 **	.29 **	-.32 **	.47 **	-.24 **	-.21 **	-.21 **
3) 大切な人のサポート(t1)	—	.74 **	.42 **	-.40 **	.42 **	.53 **	-.26 **	-.20 **	-.27 **	.62 **	.66 **	.42 **	.29 **	-.32 **	.44 **	-.24 **	-.17 **	-.17 **
4) 友人のサポート(t1)	—	.52 **	-.27 **	.34 **	-.29 **	-.14 **	-.13 **	.44 **	.48 **	.47 **	.48 **	.47 **	.32 **	-.20 **	.32 **	-.20 **	-.14 **	-.14 **
5) 社会的孤立(t1)	—	-.14 **	.25 **	-.20 **	-.04	-.07	.27 **	.29 **	.28 **	.56 **	-.14 **	.24 **	-.15 **	-.08				
6) 社会的排斥(t1)	—	-.34 **	.36 **	.25 **	.40 **	-.36 **	-.36 **	-.23 **	-.13 **	.67 **	-.25 **	.19 **	.20 **	.20 **				
7) 関係満足度(t2)	—	-.26 **	-.26 **	-.24 **	.52 **	.51 **	.31 **	.28 **	-.29 **	.72 **	-.30 **	-.28 **	-.28 **	-.28 **				
8) 孤独感(t2)	—	.34 **	.16 **	-.19 **	-.23 **	-.19 **	-.16 **	.33 **	-.20 **	.39 **	.34 **							
9) 心理的攻撃加害(t2)	—	.15 **	-.20 **	-.20 **	-.10 *	-.03	.19 **	-.20 **	.18 **	.58 **								
女性																		
10) IPVCS(t1)	—	-.30 **	-.29 **	-.19 **	-.08	.41 **	-.22 **	.19 **	.21 **									
11) 大切な人のサポート(t1)	—	.86 **	.61 **	.42 **	-.36 **	.51 **	-.33 **	-.19 **	-.19 **									
12) 大切な人のサポート(t1)	—	.69 **	.43 **	-.39 **	.50 **	-.36 **	-.16 **	-.16 **	-.16 **									
13) 友人のサポート(t1)	—	.54 **	-.29 **	.30 **	-.45 **	-.17 **												
14) 社会的孤立(t1)	—	-.19 **	.29 **	-.34 **	-.05													
15) 社会的排斥(t1)	—	-.22 **	.32 **	.22 **														
16) 関係満足度(t2)	—	-.34 **	-.20 **															
17) 孤独感(t2)	—																	
18) 心理的攻撃加害(t2)	—																	

注)t1は1時点目で測定した変数, t2は2時点目で測定した変数である。\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ 。

孤独感や心理的攻撃加害とは統計的に有意な正の相関がみられた。したがって、各性別内で見ると、それぞれのサポートが充実し、社会的孤立の程度が低いほど、親密関係においても満足が高いと言える。また、それぞれのサポートが充実し、社会的孤立の程度が低いほど、孤独感が低いばかりではなく、心理的攻撃加害も少ないと考えられる。

一方、性別をまたいだ関連を見ても同様であり、Time 1 の家族のサポート、大切な人のサポート、友人のサポート、社会的孤立とパートナーの Time 2 の関係満足度との間には統計的に有意な正の相関がみられ、これらの変数とパートナーの Time 2 の孤独感や心理的攻撃加害の間にはおおむね統計的に有意な負の相関がみられた。同様に、性別をまたいだ関連においても、Time 1 の社会的排斥はパートナーの Time 2 の関係満足度と統計的に有意な負の相関がみられ、パートナーの Time 2 の孤独感や心理的攻撃加害とは、統計的に有意な正の相関がみられた。すなわち、親密関係における一方のサポートや社会的排斥は、他方の関係満足度や孤独感、心理的攻撃加害にも影響を与えている可能性がある。

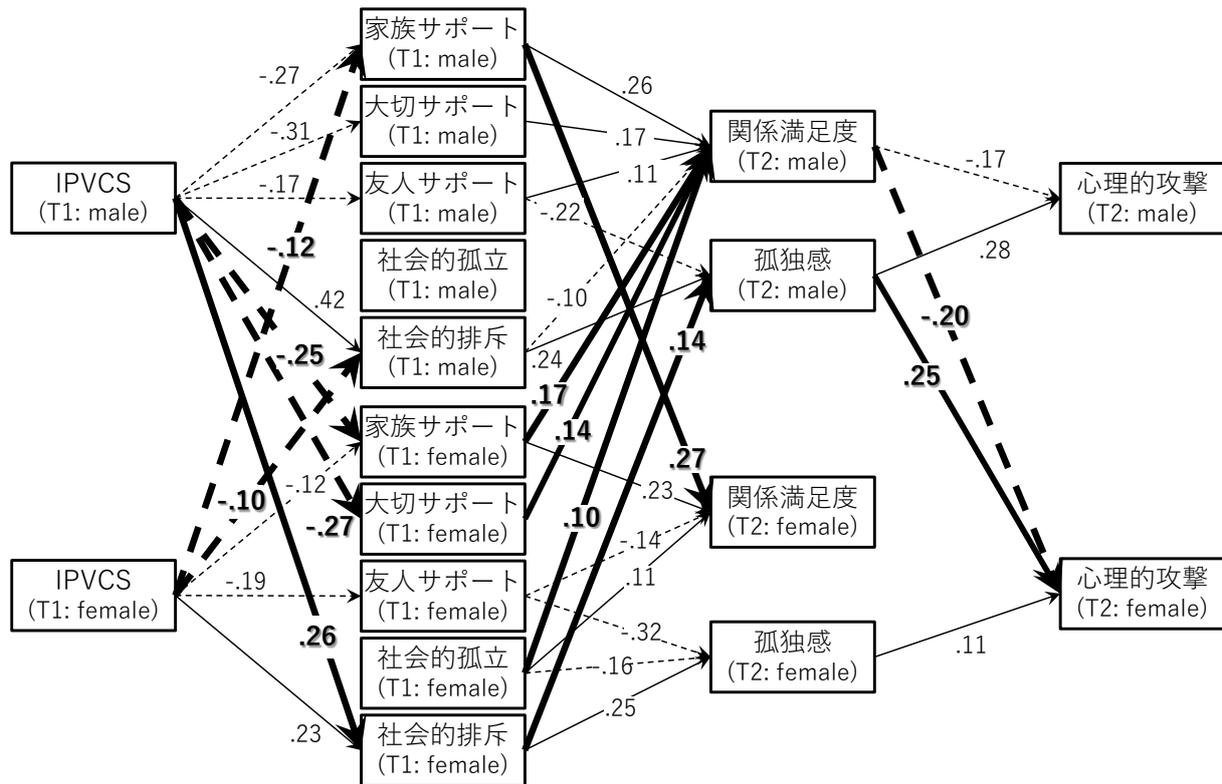
以上の分析を踏まえたうえで、以降の分析では、親密な関係における心理的攻撃加害において、夫婦間でどのような心理的なダイナミズムが存在するのかを、夫婦双方の変数の影響を統制した上で検討することとした。

#### 4. 2. 4. 支配欲求並びに社会的関係が親密関係での心理的攻撃に及ぼす影響

研究 2 では、個人特性としての支配欲求が社会的関係に影響し、こうした社会的関係の変化が関係での満足感や孤独感を介して、親密関係における心理的攻撃に影響すると仮定し、これらの仮定のもとに分析を行うこととした。この際、研究 2 でもペアレベルのデータを測定し、ペアの双方の影響を考慮した分析を行うこととした。具体的には、支配欲求と心理的攻撃加害との関係性を、男性と女性の双方のペアデータを用いて APIM を適用して解析した。Actor 効果と Partner 効果の推定には SEM を用いた。分析には AMOS26 を使用し、ペアレベルのデータに関して、最尤推定法を用いて推定を行った。分析結果の詳細を Table 6 に示した。なお、結果の理解のしやすさを考慮して、統計的に有意なパスのみを残した図を Figure 3 に示した。

Figure 3 に基づいて、Actor 効果について検討すると、男性に関しては、Time 1 の IPVCS が Time 1 の家族のサポート、大切な人のサポート、友人のサポートを抑制し、サポートが抑制されることで Time 2 の関係満足度が低下していた。また、友人のサポートが抑制されることで、孤独感を高めていた。それに加えて、Time 1 の男性の IPVCS は Time 1 の社会的排斥を促進し、社会的排斥が促進されることで Time 2 の孤独感を高めていた。最後に、関係満足度の低下、孤独感の高まりは、心理的攻撃加害を促進する方向で作用することが示された。さらに、関係満足度の低下、孤独感の高まりは、心理的攻撃加害を促進する方向で作用することが示された。以上を踏まえると、男性の場合、関係の中で支配欲求を持つことが家族や大切な人、友人のサポートを受けにくくし、それによって関係満足度が低下する一方、孤独感が増大し、結果的に心理的攻撃加害に至りやすくなる過程が存在すると考えられる。

Figure 3. IPVCS 並びに社会的関係が心理的攻撃加害に及ぼす影響



注)細線は Actor 効果を表し、太線は Partner 効果を表す。破線は抑制的な効果を表し、実線は促進的な効果を表す。図に記載されているのは統計的に有意なパスのみであり、パス係数の有意水準並びに非有意なパスの詳細については、Table 6 を参照。T1 は 1 時点目での測定変数、T2 は 2 時点目での測定変数である。図のサイズの都合上、大切な人のサポートは、大切サポートと表記したほか、心理的攻撃加害は心理的攻撃と表記した。

次に、女性の Actor 効果に関しては、Time 1 の IPVCS が Time 1 の家族のサポート、友人のサポートを抑制し、家族のサポートが抑制されることで Time 2 の関係満足度が低下していた。ただし、女性の場合、友人のサポートが抑制されることで Time 2 の関係満足度が促進されていた。一方、Time 1 の IPVCS が Time 1 の友人のサポートを抑制し、友人のサポートが抑制されることで Time 2 の孤独感が高まるほか、Time 1 の IPVCS が Time 1 の社会的排斥の感覚を促進し、社会的排斥の感覚が高まることで孤独感が高まっていた。なお、女性の場合、Time 1 の社会的孤立が孤独感を高めていた。以上に加えて、女性の場合、関係満足度と心理的攻撃加害とは統計的に有意な関連は見られず、孤独感のみが心理的攻撃的加害に統計的に有意な影響を及ぼしていた。以上の結果から考えると、女性に関しても、関係の中で支配欲求を持つことが家族や友人のサポートを受けにくくし、それによって関係満足度が低下する一方、孤独感が増大する点は概ね男性と同様であるが、孤独感のみが心理的攻撃加害を引き起こす点では男性と異なった特徴的な点であると考えられる。

以上の Actor 効果に加えて、Figure 3 に基づいて Partner 効果について確認すると、Time 1 の男性の IPVCS は、Time 1 での女性の家族のサポート、大切な人のサポートを抑制するほか、

Time 1 での女性の社会的排斥を促進していた。また、女性のそれらの変数は Time 2 での男性の関係満足度を下げるとともに、男性の孤独感を強め、この男性の Time 2 での関係満足度や孤独感が結果的に Time 2 での女性の心理的攻撃加害を促進する方向で作用していた。以上の流れのほか、女性の Time 1 の IPVCS は男性の Time 1 の家族のサポートや社会的排斥の感覚を抑制していた。そして、男性の Time 1 の家族のサポートが抑制されることで、Time 2 の女性の関係満足度が低下していた。以上の結果を踏まえると、特に男性が持つ支配欲求は女性の社会的関係を妨害し、結果的に男性自身の関係満足度や孤独感を高めていると考えられる。そして、その結果として、男性自身の心理的攻撃加害が増えるほか、女性の心理的攻撃加害を引き出している可能性が示唆された。

## 5. 総合考察

### 5. 1. 本研究のまとめ

本研究では、敵意的性差別的態度と社会的関係という二つの視点から親密関係における暴力加害に至るメカニズムを検証することを目的に二つの研究を実施した。

研究 1 では、3 か月間隔での 2 回の縦断的な Web 調査を通して、敵意的性差別的態度と親密関係における暴力加害との関連性について検討を行った。その結果、敵意的性差別的態度が強いほど、勢力に対する欲求不満が高まり、心理的攻撃が増えること、敵意的性差別的態度が強いほど、相対的・精神的被依存性認知が高まり、それが勢力に対する欲求不満を高めることを介して、心理的攻撃加害に結び付いていた。加えて、相対的・精神的被依存性認知が高まるほど、勢力に対する欲求不満が高まり、それが関係満足度を低下させることを介して、心理的攻撃加害へと結び付いていた。これらは、個人内での過程を表しているが、ペア双方の影響を考慮して分析をすると（分析 2）、支配欲求や関係満足度が個人内で影響御及ぼすだけでなく、ペアの関係満足度が相手の心理的攻撃加害を引き出す可能性が示唆された。

研究 2 では、2 か月間隔での 2 回の縦断的な Web 調査を通して、支配欲求並びに社会的関係と親密関係における暴力加害との関連性について検討を行った。その結果、個人内の過程を考えると男性では支配欲求がソーシャル・サポートを低減させ、それが関係満足度を低下させることで心理的攻撃加害を引き起こされていた。一方、女性では支配欲求は自らの家族や友人のサポートを低減させていたが、それが心理的攻撃加害に結び付くのは、孤独感を高めることによってもった。一方、ペア双方の影響を考慮すると、顕著な点として、男性の支配欲求は女性の家族や大切な人のサポートを阻害し、一方で社会的排斥の感覚を高めていた。そして、女性が家族のサポートが減少し、社会的排斥感を強く持つことは男性の関係満足度を低下させ、結果的に男性の心理的攻撃加害を引き出すだけでなく、女性の心理的攻撃加害をも引き出すことが明らかとなった。

### 5. 2. 何が親密関係での心理的攻撃加害を引き起こすのか？

本研究では 2 つの研究を通して、親密関係における心理的攻撃加害をもたらす要因を検証し

Table 6 研究2におけるAPIMによる分析結果

Actor効果		非標準化 推定値	標準誤差	標準化 推定値	p
男性					
IPVCS(t1)	→ 家族のサポート(t1)	-0.50	0.10	-.27	<.001
IPVCS(t1)	→ 大切な人のサポート(t1)	-0.58	0.10	-.31	<.001
IPVCS(t1)	→ 友人のサポート(t1)	-0.32	0.11	-.17	.003
IPVCS(t1)	→ 社会的孤立(t1)	-0.11	0.07	-.08	.152
IPVCS(t1)	→ 社会的排斥(t1)	0.70	0.08	.42	<.001
家族のサポート(t1)	→ 関係満足度(t2)	0.25	0.07	.26	<.001
家族のサポート(t1)	→ 孤独感(t2)	0.05	0.03	.13	.073
大切な人のサポート(t1)	→ 関係満足度(t2)	0.16	0.07	.17	.029
大切な人のサポート(t1)	→ 孤独感(t2)	-0.02	0.03	-.05	.579
友人のサポート(t1)	→ 関係満足度(t2)	-0.10	0.05	-.11	.036
友人のサポート(t1)	→ 孤独感(t2)	-0.07	0.02	-.22	<.001
社会的孤立(t1)	→ 関係満足度(t2)	0.02	0.05	.01	.746
社会的孤立(t1)	→ 孤独感(t2)	-0.03	0.02	-.05	.231
社会的排斥(t1)	→ 関係満足度(t2)	-0.11	0.05	-.10	.032
社会的排斥(t1)	→ 孤独感(t2)	0.10	0.02	.24	<.001
関係満足度(t2)	→ 心理的攻撃加害(t2)	-0.01	0.00	-.17	<.001
孤独感(t2)	→ 心理的攻撃加害(t2)	0.05	0.01	.28	<.001
女性	女性				
IPVCS(t1)	→ 家族のサポート(t1)	-0.23	0.10	-.12	.026
IPVCS(t1)	→ 大切な人のサポート(t1)	-0.19	0.10	-.10	.066
IPVCS(t1)	→ 友人のサポート(t1)	-0.40	0.12	-.19	<.001
IPVCS(t1)	→ 社会的孤立(t1)	-0.02	0.08	-.02	.780
IPVCS(t1)	→ 社会的排斥(t1)	0.39	0.09	.23	<.001
家族のサポート(t1)	→ 関係満足度(t2)	0.24	0.07	.23	<.001
家族のサポート(t1)	→ 孤独感(t2)	0.00	0.03	.01	.890
大切な人のサポート(t1)	→ 関係満足度(t2)	0.26	0.08	.24	.001
大切な人のサポート(t1)	→ 孤独感(t2)	0.00	0.03	.00	.996
友人のサポート(t1)	→ 関係満足度(t2)	-0.14	0.05	-.14	.005
友人のサポート(t1)	→ 孤独感(t2)	-0.13	0.02	-.32	<.001
社会的孤立(t1)	→ 関係満足度(t2)	0.17	0.06	.11	.007
社会的孤立(t1)	→ 孤独感(t2)	-0.10	0.03	-.16	<.001
社会的排斥(t1)	→ 関係満足度(t2)	0.00	0.06	.00	.999
社会的排斥(t1)	→ 孤独感(t2)	0.12	0.02	.25	<.001
関係満足度(t2)	→ 心理的攻撃加害(t2)	0.00	0.00	.04	.497
孤独感(t2)	→ 心理的攻撃加害(t2)	0.02	0.01	.11	.007

Table 6 研究2におけるAPIMによる分析結果(つづき)

Partner効果		非標準化 推定値	標準誤差	標準化 推定値	<i>p</i>
男性	女性				
IPVCS(t1)	→ 家族のサポート(t1)	-0.45	0.10	-.25	<.001
IPVCS(t1)	→ 大切な人のサポート(t1)	-0.50	0.10	-.27	<.001
IPVCS(t1)	→ 友人のサポート(t1)	0.02	0.11	.01	.889
IPVCS(t1)	→ 社会的孤立(t1)	-0.11	0.07	-.09	.127
IPVCS(t1)	→ 社会的排斥(t1)	0.44	0.08	.26	<.001
家族のサポート(t1)	→ 関係満足度(t2)	0.28	0.07	.27	<.001
家族のサポート(t1)	→ 孤独感(t2)	-0.02	0.03	-.03	.628
大切な人のサポート(t1)	→ 関係満足度(t2)	-0.07	0.08	-.07	.392
大切な人のサポート(t1)	→ 孤独感(t2)	-0.03	0.03	-.06	.420
友人のサポート(t1)	→ 関係満足度(t2)	0.01	0.05	.01	.879
友人のサポート(t1)	→ 孤独感(t2)	0.03	0.02	.07	.223
社会的孤立(t1)	→ 関係満足度(t2)	0.02	0.06	.01	.791
社会的孤立(t1)	→ 孤独感(t2)	0.04	0.03	.06	.151
社会的排斥(t1)	→ 関係満足度(t2)	-0.02	0.06	-.02	.685
社会的排斥(t1)	→ 孤独感(t2)	-0.04	0.02	-.09	.076
関係満足度(t2)	→ 心理的攻撃加害(t2)	0.05	0.01	.25	<.001
孤独感(t2)	→ 心理的攻撃加害(t2)	-0.01	0.00	-.20	<.001
女性	男性				
IPVCS(t1)	→ 家族のサポート(t1)	-0.23	0.10	-.12	.024
IPVCS(t1)	→ 大切な人のサポート(t1)	-0.10	0.11	-.05	.365
IPVCS(t1)	→ 友人のサポート(t1)	-0.02	0.12	-.01	.843
IPVCS(t1)	→ 社会的孤立(t1)	-0.01	0.08	-.01	.853
IPVCS(t1)	→ 社会的排斥(t1)	0.17	0.09	.10	.045
家族のサポート(t1)	→ 関係満足度(t2)	0.17	0.06	.17	.009
家族のサポート(t1)	→ 孤独感(t2)	0.03	0.03	.08	.289
大切な人のサポート(t1)	→ 関係満足度(t2)	0.14	0.07	.14	.047
大切な人のサポート(t1)	→ 孤独感(t2)	-0.03	0.03	-.09	.266
友人のサポート(t1)	→ 関係満足度(t2)	-0.07	0.04	-.09	.092
友人のサポート(t1)	→ 孤独感(t2)	0.01	0.02	.02	.754
社会的孤立(t1)	→ 関係満足度(t2)	0.14	0.06	.10	.014
社会的孤立(t1)	→ 孤独感(t2)	-0.02	0.02	-.03	.494
社会的排斥(t1)	→ 関係満足度(t2)	-0.02	0.05	-.02	.728
社会的排斥(t1)	→ 孤独感(t2)	0.06	0.02	.14	.005
関係満足度(t2)	→ 心理的攻撃加害(t2)	0.00	0.00	-.01	.881
孤独感(t2)	→ 心理的攻撃加害(t2)	0.00	0.01	.01	.863

注) t1は1時点目で測定した変数, t2は2時点目で測定した変数である。

てきた。それでは、いったい何が親密関係での心理的攻撃加害を引き起こすといえるのであろうか。回答はいくつか提出することができるが、一つは、親密関係における心理的攻撃加害は、個人の内的過程として関係性における優越性に起因する現象であると考えられる。研究1の分析1では、勢力に対する欲求不満が心理的攻撃加害をもたらし、分析2では特に男性の勢力欲求は相手の要因を統制したとしても心理的攻撃加害を促進していた。また、研究1の分析1から、これらの関係における優越性は敵意的な性差別的信念、あるいは被依存性によって増強されると考えられる。したがって、心理的攻撃加害に関する予防的教育や治療的教育を考える場合には、関係性における平等性、すなわち二者の関係は平等であり、どちらが優越しているという視点を持つことが関係を破壊するリスクであることを伝えることが必要である。

一方、研究1の分析2並びに研究2の結果を踏まえるならば、個人の内的要因のみによって、心理的攻撃加害のすべてが説明できるとは言えない。研究1の分析2では女性の関係満足度が男性の心理的攻撃加害を抑制していた。また、研究2については、男性の支配欲求は女性の人間関係をコントロールし、結果的に男性の関係満足度を低下させることを通して、男女両方の心理的攻撃加害を引き出していた。婚姻関係も、恋愛関係も、当然他者との関係性の上に成り立つものである。それゆえに、相手がどのような反応をするのかによって、当事者の行為も変わってくる可能性は容易に想像できる。本研究は、そうした二者関係のダイナミズムを明らかにしたものであると考えられる。

それでは、本研究の結果から、予防的介入や治療的介入に対してどのようなことが言えるのか。一つは、ペアの双方が関係をどのように捉えているかが重要であるという点である。研究1の分析2では、女性の関係満足度が男性の心理的攻撃加害を抑制していた。また、研究2では女性の関係満足度は両性の心理的攻撃加害に影響を及ぼしていなかったが、男性の関係満足度が両性の心理的攻撃加害に影響を及ぼしていた。研究1と研究2とで、どちらの性の満足度が重要かは一貫していないが、少なくとも関係に満足している関係性においては、心理的攻撃加害が抑制される。関係性における満足度が下がるのは、不和をうまく解決できないなど、多くの要因が関与していると考えられるが、こうした葛藤場面における問題解決能力を養うことが関係における満足度に影響すると思われる。したがって、加害者（多くの場合男性）にのみ介入するのではなく、二者双方の社会的スキルを高める視点が必要なのかもしれない。この点に関しては、本研究では社会的スキルまでを測定しているわけではないので、推測の域を出ない議論ではあるが、今後の視点として、こうしたスキルを高めることが、関係満足度を高めるかどうか、ひいては心理的攻撃加害を抑制し得るかどうかに関して検討が必要であろう。

もう一点、本研究の結果において、予防的介入や治療的介入に対して資する点は、支配欲求を持つことが相手の人間関係を破壊する可能性を示した点である。研究2の結果を見ると、特に両性共に支配欲求を強く持つほど、家族のサポートを妨害していた。そして、家族のサポートが減少することで関係満足度が低下していた。多くの場合、家族のサポートは最も身近なサポートであり、また最も影響力の大きなサポートの一つであろう。相手をコントロールするために、まずは家族との関係を妨害することは大いにあり得るものであり、支配のための戦略と

して家族との関係を妨害することは想像に難しくない。Follingstad et al. (2002) は、関係コントロール欲求が暴力や心理的攻撃加害をもたらすことを指摘しているが、これは個人内の影響過程として完結するものではなく、一方の支配欲求が他方の関係を妨害し、結果的に双方の関係満足度が低下するという二者間でのダイナミズムとして存在することを、本研究の知見は示している。したがって、予防的介入や治療的介入にあたっては、こうした知見を踏まえつつ、第三者としてのサポートを根気強く行うことが必要である。特に、親密な関係における暴力では、とすれば被害者の側のサポートのみに注目しがちであるが、親密関係における暴力が二者関係の上に成立するのであれば、加害者の側にもサポートを行うべきであると考えられる。それが、二者関係でのダイナミズムとして、二者双方の暴力を抑制することにつながるだろう。

最後に、本研究では必ずしも明確な分析結果が得られているわけではないが、二者における相互的攻撃行動の視点について議論する。Whitaker et al. (2007) の研究では、若年成人の全国サンプルにおいて、相互的暴力は非相互的暴力と同じくらい一般的であり、暴力的関係の約半数は相互的暴力によって特徴づけられていること、さらに重要なことは、非相互的暴力よりも相互的暴力の方がより頻繁に（女性によってのみ）暴力が行われ、傷害に至る可能性が高いことを示している。善悪という側面から考えれば、暴力の加害者が圧倒的に悪であることは明白である。しかし、なぜ暴力が起こるのかという点を二者関係の観点から考えると、そこには双方向の力動が働く可能性があるということである。本研究の知見は、まさにこの点を示したものであり、親密関係という複雑な関係性においては、一つの要因だけで暴力行動の発生を説明することは不可能であるということを示したものであると理解できる。この視点を忘れると、関係性において一人の悪者を想定し、予防的介入や治療的介入を行うという根本的な解決にならない対応を行う可能性がある。そのような誤りを起こさないためにも、関係性という視点を忘れることなく、予防的介入や治療的介入を考えることが必要である。

### 5. 3. 本研究の限界点と今後の展望

本研究では、敵意的性差別的態度と社会的関係という視点から、二つの研究を通して親密な関係における心理的暴力加害に影響を及ぼす要因を明らかにしてきた。そして、本研究の結果が親密関係における暴力の予防的介入や治療的介入においてどのような意味を持つのかを議論してきた。しかしながら、本研究にはいくつかの限界点があるのも事実である。本稿の最後に、本研究の限界点と今後の展望について論議する。

まず、最も重要なのは、本研究は比較的健全な関係性にある調査対象者を対象としている点に限界があるだろう。これは、心理的暴力加害の得点にも表れており、フローア効果が生じている可能性がある。これは、ネガティブな現象を扱う上での方法論的な限界点であるともいえるが、Web 調査で2度回答してくれる対象者は協力的な回答者である可能性が高く、本当にシビアな関係性にある対象者ではないと思われる。したがって、今後の展望として、既に暴力の問題が顕在化し、相談機関等の問題になっている対象者を対象としても、本研究の知見が再現可能かを検証することが必要であるだろう。

二点目として、2回の調査期間の問題があるだろう。研究1では3か月間隔、研究2では2か月間隔と比較的短期間で2回調査を行っている。そして、2時点目の攻撃行動を1時点目の説明変数で説明することを試みている。2回の調査期間が比較的短期間であったことから、その間に攻撃行動が起りにくかった可能性がある。この点から、より長期的な関係での攻撃行動をターゲットにすることも必要である。例えば、Kanemasa, Miyagawa, & Arai (2022) では、3か月間隔ではあるが4回(1年間)にわたって追跡的に調査を行っている。このように長期的な視点から調査を行うことも必要であると思われる。この点と関連して、1時点目から2時点目までに大きなライフイベントが起こったかどうかを、本研究では統制できていなかった。この点も考慮したうえで、より長期的な関係性における心理的攻撃加害を扱う必要がある。

最後に、本助成研究では、当初に既婚者を対象とするだけでなく、未婚の交際関係にあるカップルも対象とする予定であった。ペアデータとしての調査対象者をできるだけ多く確保するために、既婚者のみを対象とした研究に変更を行ったが、それは未婚の交際関係にあるカップルの調査が不要ということではない。本研究の知見が、未婚の交際関係にあるカップルにも当てはまるかは未定であり、今後、こうした対象者に対しても調査を行うことが必要である。

いずれにしても、本研究では、親密関係における暴力に対する効果的な予防的介入や治療的介入に資する知見を提出することを目標に研究を実施してきた。この目的に対する研究は本研究だけで完結するものではなく、今後も継続的に、特に日本という文化的文脈における知見の一層の集積が求められる。

## 謝辞

本研究を実施するにあたり、相馬敏彦先生(広島大学)に測定尺度等についてアドバイスをいただいたほか、未公開の尺度をご提供いただきました。また、研究助成元である公益財団法人日工組社会安全研究財団には研究助成のみならず、様々な点でご支援をいただきました。特に、研究遂行上での問題に親身に対応してくださいました研究助成係担当の方には、たいへんお世話になりました。ここに記して、皆様に心より感謝申し上げます。

## 引用文献

- Anderson, C., John, O. P., & Keltner, D. (2012). The personal sense of power. *Journal of Personality, 80*, 313-344.
- Archer, J. (2000). Sex differences in aggression between heterosexual partners: A meta-analytic review. *Psychological Bulletin, 126*, 651-680.
- 浅野良輔・五十嵐祐 (2015). 精神的健康・幸福度をめぐる新たな二者関係理論とその実証方法 心理学研究, 86, 481-497.
- Barnett, O. W., Lee, C. Y., & Thelen, R. E. (1997). Gender Differences in Attributions of Self-Defense and Control in Interpartner Aggression. *Violence Against Women, 3*(5), 462-481.
- Baumeister, R. F., & Leary, M. R., (1995). The need to belong: Desire for interpersonal attachments as a fundamental human motivation. *Psychological Bulletin, 117*(3), 497-529.

- Bledsoe, L. K., Sar, B. K. (2011). Intimate Partner Violence Control Scale: Development and initial testing. *Journal of Family Violence, 26*, 171-184.
- Bookwala, J., Frieze, I. H., Smith, C., & Ryan, K. (1992). Predictors of dating violence: A multivariate analysis. *Violence and Victims, 7*(4), 297-311.
- Cacioppo, J. T., & Hawkley, L. C. (2009). Perceived social isolation and cognition. *TRENDS in Cognitive Sciences, 13*(10), 447-454.
- Chen, Z., Fiske, S. T., & Lee, T. L. (2009). Ambivalent Sexism and power-related gender-role ideology in marriage. *Sex Roles, 60*, 765-778.
- Cohen, L. E. & Felson, M. (1979). Social change and crime trends: A routine activity approach. *American Sociological Review, 44*(4), 588-608.
- Coker, A. L., McKeown, R. E., Sanderson, M., Davis, K. E., Valois, R. F., & Huebner, S. E. (2000). Severe dating violence and quality of life among South Carolina high school students. *American Journal of Preventive Medicine, 19*(4), 220-227.
- Cross, E. J., Overall, N. C., Hammond, M. D., & Fletcher, G. (2017). When does men s hostile sexism predict relationship aggression? The moderating role of partner commitment. *Social Psychological and Personality Science, 8*, 331-340.
- Cross, E. J., Overall, N. C., Low, R. S., & McNulty, J. (2019). An interdependence account of sexism and power: Men s hostile sexism, biased perceptions of low power, and relationship aggression. *Journal of Personality and Social Psychology, 117*, 338-363.
- Eisenberger, N. I., & Lieberman, M. D. (2004). Why rejection hurts: A common neural alarm system for physical and social pain. *TRENDS in Cognitive Sciences, 8*(7), 294-300.
- Fernández-González, L., Wekerle, C., & Goldstein, A. L. (2012). Measuring adolescent dating violence: Development of ‘Conflict in Adolescent Dating Relationships Inventory’ short form. *Advances in Mental Health, 11*(1), 35-54.
- Follingstad, D. R., Bradley, R. G., Helff, C. M., & Laughlin, J. E. (2002). A model for predicting dating violence: Anxious attachment, angry temperament, and need for relationship control. *Violence and Victims, 17*, 35-47.
- Foshee, V. A. (1996). Gender differences in adolescent dating abuse prevalence, types and injuries. *Health Education Research, 11*, 275-286.
- Glick, P. & Fiske, S. T. (1996). The Ambivalent Sexism Inventory: Differentiating hostile and benevolent sexism. *Journal of Personality and Social Psychology, 70*, 491-512.
- Gover, A. R. (2004). Risky lifestyles and dating violence: A theoretical test of violent victimization. *Journal of Criminal Justice, 32*, 171-180.
- Hughes, M. E., Waite, L. J., Hawkley, L. C., & Cacioppo, J. T. (2004). A short scale for measuring loneliness in large surveys: Results from two population-based studies. *Research on Aging, 26*, 655-72.
- Igarashi, T. (2019). Development of the Japanese version of the three-item loneliness scale. *BMC Psychology, 7*, 20. <https://doi.org/10.1186/s40359-019-0285-0>.
- 伊藤裕子・相良順子 (2012). 愛情尺度の作成と信頼性・妥当性の検討—中高年期夫婦を対象に— 心理学研究, 83, 211-216.
- 岩佐一・権藤恭之・増井幸恵・稲垣宏樹・河合千恵子・大塚理加・小川まどか・高山緑・藺牟田洋美・鈴木隆雄 (2007). 日本語版「ソーシャル・サポート尺度」の信頼性ならびに妥当性—中高年者を対象とした検討— 厚生学の指標, 54 (6), 26-33.
- Kanemasa, Y., Miyagawa, Y., & Arai, T. (2022). Do the Dark Triad and psychological intimate partner violence 1 mutually reinforce each other? An examination from a four-wave longitudinal study. *Personality and Individual Difference, 196*, 111714.
- Kenny, D. A. (1996). Models of non-independence in dyadic research. *Journal of Social and Personal*

*Relationships*, 13, 279–294.

- 古村健太郎・仲嶺真・松井豊 (2013). 投資モデル尺度の邦訳と信頼性・妥当性の検討筑波大学心理学研究, 46, 39-47.
- 栗本鮎美・栗田主一・大久保孝義・坪田 (宇津木) 恵・浅山敬・高橋香子・末永カツ子・佐藤洋・今井潤 (2011). 日本語版 Lubben Social Network Scale 短縮版 (LSNS-6) の作成と信頼性および妥当性の検討 日本老年医学会雑誌, 48 (2), 149-157.
- Lanier, C. & Maume, M. O. (2009). Intimate partner violence and social isolation across the rural/urban divide. *Violence Against Women*, 15(11), 1311-1330.
- Lewis, S. F., Travea, L., & Fremouw, W. J. (2002). Characteristics of female perpetrators and victims of dating violence. *Violence and Victims*, 17, 593-606.
- Lubben, J. E. (1988). Assessing Social Networks Among elderly populations. *Family & Community Health*, 11, 4252.
- 森永康子・東 智美・糸賀日奈子・曾我部里紗・上村冴子 (2019). Power とシステム正当化—van der Toorn et al.(2015)の追試— 広島大学心理学研究, 19.
- 内閣府男女共同参画局 (2021a). 令和3年版男女共同参画白書 内閣府
- 内閣府男女共同参画局 (2021b). 男女間における暴力に関する調査 (令和2年度調査) 報告書 内閣府
- Olsen, J. A. & Kenny, D. A. (2006). Structural equation modeling with interchangeable dyads. *Psychological Methods*, 11(2), 127-141.
- Richards, T. N., & Branch, K. A. (2012). The relationship between social support and adolescent dating violence: A comparison across genders. *Journal of Interpersonal Violence*, 27(8), 1540-1561.
- Richards, T. N., Branch, K. A., & Ray, K. (2014). The impact of parental and peer social support on dating violence perpetration and victimization among female adolescents: A longitudinal study. *Violence and Victims*, 29(2), 317-331.
- Rodrigues, P., Hébert, M. & Philibert, M. (2022). Associations between neighborhood characteristics and dating violence: does spatial scale matter?. *International Journal of Health Geographics*, 21, 6.
- Rusbult, C. E., Martz, j. M., & Agnew, C. (1998). The investment model scale: Measuring commitment level, satisfaction level, quality of alternatives and investment size. *Personal Relationships*, 5, 357-391.
- 清水裕士 (2014). 個人と集団のマルチレベル分析 ナカニシヤ出版
- Shorey, R. C., Cornelius, T. L., & Bell, K. M. (2008). A critical review of theoretical frameworks for dating violence: Comparing the dating and marital fields. *Aggression and Violent Behavior*, 13, 185-194.
- 相馬敏彦・杉山詔二・古村健太郎・山中多民子・伊藤言 (2019). 2018年度一般研究助成研究報告書 DV 一次予防プログラムの深化に向けて—当事者因子から対人環境因子への視点の拡張—公益財団法人日工組社会安全研究財団
- Souma, T., Komura, K., Arai, T., Shimada, T., & Kanemasa, Y. (2022). Changes in collective efficacy's preventive effect on intimate partner violence during the COVID-19 pandemic. *International Journal of Environment. Research and. Public Health*, 19, 12849. 10.3390/ijerph191912849.
- 谷口淳一・清水裕士 (2016). 大学新入生の自己高揚的自己呈示が友人関係の形成と自尊心に及ぼす影響—APIM を用いたペア縦断データの分析— 実験社会心理学研究, 56 (2), 175-186.
- Twenge, J. M., Catanese, K. R., & Baumeister, R. F. (2002). Social exclusion causes self-defeating behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 83(3), 606-615.
- 宇井美代子・山本眞理子 (2001). Ambivalent Sexism Inventory (ASI) 日本語版の信頼性と妥当性の検討 第42回日本社会心理学会大会発表論文集, 300-301.
- Whitaker, D. J., Haileyesus, T., Swahn, M., & Saltzman, L. S. (2007). Differences in Frequency of Violence and reported injury between relationships with reciprocal and nonreciprocal intimate partner violence. *American Journal of Public Health*, 97, 941-947.

Zimet, G, D. et al. (1988). The Multidimensional Scale of Perceived Social Support. *Journal of Personality Assessment*, 52, 30-41.